

第 99 回 歴史探訪の会 忍者と芭蕉のまち伊賀上野を語り部と歩こう

日 時： 令和 7 年 5 月 21 日(水)

場 所： 三重県伊賀市

世話人： 林 寛

伊賀は山間にぽかっと現れる静かな盆地である。400 万年前には古い琵琶湖がこの地にあり、その湖底が伊賀盆地になったという。肥沃な粘土質の土壤が豊かな稲作を支え、おいしい米が美味しい和菓子や旨い酒を作る。この地で 29 歳まで過ごした芭蕉翁は、江戸の暮らしに馴染んでも、旅の途中で度々故郷伊賀の地を踏んだとか。故郷の俳句仲間や身内の人たちとの語らいばかりではなく、伊賀の美味しい米や酒など、故郷の味を求めたのではないだろうか。

今回は、江戸時代の 1600 年代後半に生きた芭蕉翁の故郷 伊賀の地で芭蕉翁の足跡をたどりながら、歴史探訪の会の長い経歴の中でも初めて「俳句を詠む」という企画を取り入れた。雨の予報が気がかりな中、蒸し暑い一日だったが、幸い雨に会うことはなく行程を完了できた。今例会では特別に俳句同好会和住会長さま、川柳同好会喜田会長さまのお二人のご参加を賜り、会員が詠んだ俳句の選定と、講評・ご指導をいただいた。会員 21 名と合わせて合計 23 名の参加者が 3 班に分かれて、「いがうえの語り部の会」の 3 名のガイドさんたちと、伊賀上野城下町や、お城がある上野公園をめぐる。

コース： 伊賀鉄道上野市駅（集合）～ ①上野天神宮 ～ ②芭蕉翁生家 ～ ③愛染院(故郷塚) ～ 寺町通り ～ ④蓑虫庵(休憩・俳句川柳提出・昼食) ～ ⑤高石垣・伊賀上野城(集合写真) ～ ⑥俳聖殿(集合写真・句会講評) ～ ⑦芭蕉翁記念館 ～ 伊賀鉄道上野市駅（解散） 歩く距離は約 6km

【集合】

伊賀鉄道上野市駅に集合。駅の表示は「忍者市駅」。下に申しわけ程度に「上野市駅」とあった。

近鉄線からは伊賀神戸駅経由で、JR 線からは伊賀上野駅経由で当駅に着く。改札を出てくる会員のみなさんは口をそろえて「遠いなあ!」。早起きして遠路参加いただきありがとうございました。いつもの例会に比べて参加者は少なかった。



忍者市駅 下にひっそりと「上野市駅」とある



駅前広場に立つ芭蕉翁の像を横目で見ながら進む。伊賀の街は俳句が盛ん。子供たちは夏休みの宿題に俳句を作って提出するとか。伊賀市民はみんな俳句の心得があるといえそうだ。

① 上野天神宮

上野市駅から 5 分ほど歩くと上野天神宮に着く。地元の氏神さまだ。

29 歳まで伊賀の地で過ごした芭蕉翁は 1672 年(寛文 12)、菅原神社(現上野天神宮)に句集『貝おほひ』を奉納したのち、江戸に旅立った。

みんなでお参りした。

② 芭蕉翁生家

上野天神宮から徒歩 10 分で芭蕉翁生家に着く。芭蕉翁は幼少の頃から青年期までここで過ごした。芭蕉翁の父松尾与左衛門は柘植(つげ)から伊賀に引っ越してきたという。芭蕉翁が柘植で生まれていたのか、伊賀で生まれたのか、よく分かっていないそうだ。

生家には明治時代まで松尾家が住んでいた。現在の建物は芭蕉翁の父のものではなく、江戸末期のものだと推定される。市の史跡

朝礼では、内海会長が俳句、川柳同好会とのコラボになった趣旨を説明し、両同好会長を紹介した。本日の案内をお願いした「いがうえの語り部の会」のガイドさん 3 名の紹介、今例会に初めて参加した会員の紹介、コース紹介のあと、3 班に分かれて出発した。



生家の裏庭には「釣月軒」が建つ。芭蕉翁は『貝おほひ』を釣月軒で執筆した。また、江戸や旅先から帰郷したときも釣月軒で過ごしたという。今回は残念ながら時間の都合で生家に入館できなかった。下の2枚は以前、下見に訪れたときに撮った生家の敷地内の写真である。



芭蕉翁生家の庭



釣月軒のなか

『古里や 臍のをに泣く としのくれ』（ふるさとや へそのおになく としのくれ）
芭蕉翁が帰郷して兄たちと尽きない思い出を語るなか、ふと臍の緒を見つけて涙した。

③ 愛染院(故郷塚)

生家のすぐ近く、歩いて3分のところに松尾家の菩提寺「愛染院」がある。
『家はみな 杖にしら髪の 墓参り』（いえはみな つえにしらがの はかまいり）
芭蕉翁が帰郷して一家揃って墓参りしたときの句だ。長い年月を経て、親族のだれもかれもが年老いてしまった寂しさと、睦まじく先祖の墓参りする喜びが巧みに表現されている。

芭蕉翁は1694年(元禄7)10月12日、旅先の大坂で51歳の生涯を閉じた。翁の遺骸は翌13日に淀川を上り、近江の義仲寺に運ばれた。14日葬儀、翁の遺言に従って木曾義仲の墓の隣に葬られた。門人たちが翁の遺髪を伊賀に持ち帰り、愛染院の境内に安置して「故郷塚」と呼んだ。私たちは香華料を供して故郷塚をお参りした。

寺町通り

愛染院から次の探訪先「蓑虫庵」までが少し遠い。およそ40分かけて辿る。途中、伊賀鉄道の踏切を渡り、何軒かの和菓子屋さんの前を通り過ぎると閑静な「寺町通り」に入る。どこまでもまっすぐな道。往時の風情を醸して電柱が1本もない。

いくつかの宗派のお寺が仲良く並び、白壁が青空に映えていた。藤堂高虎公、および藤堂藩歴代藩主の菩提を弔う日蓮宗「上行寺」や、日本三大敵討ちのひとつ、伊賀上野城下「鍵屋の辻の決闘」で渡辺数馬に討たれた河合又五郎を弔う「萬福寺」などが並んでいた。



④ 蓑虫庵

寺町通りを過ぎて次の探訪先「蓑虫庵」に向かう。大通りに面して小さな公園があり句碑が立っている。

『みのむしの ねを聞にこよ くさの庵』
(みのむしの ねをききにこよ くさのあん)

「蓑虫庵」の名前の由来となる句だ。

句碑が立つ公園から5分歩くと、ようやく「蓑虫庵」到着だ。庵内の茶室と和室をお借りしてあり、昼食休憩と、今日のメインイベントの俳句作りが待っている。

右はかつての「蓑虫庵」入口である(庵の内から撮影)。現在は使えない。茅葺屋根が印象的だ。

芭蕉翁の弟子服部土芳が1688年(貞享5)ここに庵をむすび「些中庵(さちゅうあん)」と名付けた。訪れた芭蕉翁が面壁の達磨図に「みのむしの…」の句を讃したことが「蓑虫庵」の名前の由来である。蓑虫庵は、芭蕉五庵(無名庵、西麓庵、東麓庵、瓢竹庵、蓑虫庵)のうち唯一現存する庵である。



蒸し暑い午前中、芭蕉翁の足跡をたどって疲れた体に和室のエアコン(管理人さんの心遣い)が実に心地よく、手弁当に舌鼓を打ちながら、名句づくりに挑戦した。以下は庵内の情景だ。

管理棟通路と庭



句の出来上りを待つ喜田会長



芭蕉堂



蓑虫庵



服部土芳の墓



古池塚



菘虫庵での昼食、匂づくり、休憩の後、一路「伊賀上野城」がある上野公園へ向かう。途中、伊賀唯一の銭湯「一乃湯」や、忍者が住まいした「忍町」がある中乃立町通りを北に進む。



一乃湯



忍者が住んだという忍町(しのびまち)

中乃立町通りを進む 1 班



⑤ 高石垣・伊賀上野城

左に明治校舎が残る上野高等学校、右に上野西小学校、その真ん中にある「白鳳門」が伊賀上野城への入り口だ。白鳳門をぐる道の突き当りに「上野城跡」の石碑がある。碑文によると、

1585 年(天正 13)伊賀の国主となった筒井定次が三層の天守をもつ平山城をここに築いた。筒井氏国替えのあと、藤堂和泉守高虎が入国、城を西方に拡張し雄大な本丸を築き、外堀を画して典型的な近世城下町とした。

残念なことに、天守は 1611 年(慶長 16)、作事なかばに台風のため倒壊、再び建てられることはなかった。

現在のものは、1935 年(昭和 10)の復興である。

有名な「高石垣」は「全国一・二の高さ」と看板にある。家康は、大坂方と手切れになった場合を想定して、伊賀に腹心の高虎を配し、この地で決戦をと考えたとか。





伊賀上野城の石段に参加者一同が勢ぞろい、語り部さんたちにも入っていただいて集合写真撮り。

⑥ 俳聖殿

俳聖松尾芭蕉の生誕 300 年を記念して (生誕は 1644 年:前出)、1942 年(昭和 17)に建てられた。木造二階建て、檜瓦葺、八角重層塔建式の聖堂で、笠を被った旅人をイメージできる美しい建物である。

殿内には伊賀焼の等身大「芭蕉座像」が安置され、芭蕉翁の命日 10 月 12 日に催す「芭蕉祭」で公開される。

三重県の有形文化財。2010 年には国の重要文化財に指定された。





俳聖殿前で再び勢ぞろいして2カ所目の集合写真を撮った。

句会講評

全員が集合写真に納まった後、俳聖殿前の木陰に集まって昼食時に提出した各会員の句の講評と優秀句を選定した結果発表があった。発表者は和住会長と喜田会長。俳句は自分が感じたことを素直に言葉で表現すればいい、とは喜田会長のお言葉。それがなかなか難しい。

入選6句をご披露します。

和住会長撰 炎天下芭蕉追いかけて夢めぐる
目に青葉句箋配られ初俳句
俳聖を偲び探訪夏浅し

喜田会長撰 伊賀の旅忍者電車がお出迎え
江戸の世のインフルエンサー芭蕉さん
伊賀忍び家康助けあじさい花

選ばれた6作品に対して賞品が渡された。賞品は伊賀銘菓2品。

1. 芭蕉翁が愛した「くひな笛」をそのまま名付けた和菓子「くひな笛」
 2. 忍者の携帯食との噂がある伊賀名物「かたやき」
- 受賞された方々、おめでとうございます。

行程も最後になった。時刻は 14 時を回った。蒸し暑くて移動がたいへんだったが、なんとか雨に会わずにお開きになりそうで、ホッとひと息。しかし、空は暗く、時おり雷の響く音。今日の総まとめになる「芭蕉翁記念館」へ急ぐ。

⑦ 芭蕉翁記念館

芭蕉翁記念館は俳聖松尾芭蕉翁を顕彰するために、1959 年(昭和 34)神部満之助さんの篤志により上野公園の一角に建てられた。

記念館には全員が一度に入館して学芸員さんから説明を聞いた。

「松尾芭蕉翁」直筆の色紙 「たび人と我名よばれむ初しぐら」

や遺言状のほか、近世から現代にいたる俳諧に関する資料などを保存し、展示していた。

豊富な資料をじっくり見たかったが、なにしろ外は危うい雲行き、突然襲ってきそうな土砂降り雨を心配して、後ろ髪引かれる思いで上野市駅への道を急いだ。



【解散】

芭蕉翁記念館から約 15 分で集合場所 伊賀鉄道上野市駅 に戻った。

内海会長が、当例会のために尽力した方々、和住会長、喜田会長、いがうえの語り部の会のガイドさんたち、担当世話人、に対して感謝の気持ちを表された。

続いて、内海会長が次回 7 月例会(第 100 回記念例会)の案内をされた。

最後に、担当世話人 林 からガイドさんたち、会員のみなさんに対して、当例会を無事終えることができたお礼を申し上げてお開きとした。

14 時 48 分発の電車に余裕をもって間に合ったこと、雨に会わずに全行程を終えられたことが何よりよかった。

【謝辞】

- ・和住会長さま、喜田会長さま 俳句指導と句の講評・選定 ありがとうございます。
- ・「いがうえの語り部の会」ガイドのみなさま、企画当初からの例会日までの長い期間の中で貴重なアドバイスと、例会当日の丁寧なご案内、ありがとうございます。
- ・この報告書を作成するにあたり、和住会長さま、服部さまからたくさんの写真のご提供を受けました。ありがとうございます。